

# 「米子しょうじき村」の復活で 地域に元気を取り戻す

(鳥取県米子市)

第19回米子しょうじき村実行委員長・有限会社長田茶店 社長 **長田 吉太郎**



## プロフィール

ながた・きちたろう  
1979年生まれ。大学を中退後、すぐに福岡県八女市の茶問屋に就職。その後、兵庫県の中小企業大学校の後継者コースを経て、2003年に長田茶店に入社。2008年先代死去に伴い社長に就任。2009年には米子しょうじき村を復活させ、実行委員長を務める。

**Q** 昨年11月に「米子しょうじき村」が7年ぶりに復活し、多くの人にぎわいました。まず、しょうじき村の趣旨等についてお聞かせください。

長田：米子市岩倉町でしょうじき村が最初に開催されたのは1984（昭和59）年です。岩倉町は加茂川に面していることもあって昔から舟運が盛んでした。江戸時代には北前船なども寄港しており、宿や商店、倉庫などもたくさんあって、非常ににぎわっていました。しかし、郊外に大型店舗が立地するにつれて商店街を歩く人の姿が少なくなり、かつて40軒近くあった商店も大きく減少しました。そうしたなかで、地元の人たちの間から「元気を取り戻そう」という思いが自然発生的に生まれ、皆が意見を寄せ合った結果、しょうじき村まつりを開催することになったのです。といっても、集客を目的としたイベントではありません。わざわざ「正直」を名前に付しているのは「商いに欠かせないのは正直である」という思いからです。そして、自分たちが商売できるのも、この土地のおかげであり、地球のおかげであり、太陽のおかげです。それに感謝する気持ちをイベントとして表そうと考えたのです。したがって、一般的なイベントのようにメインとなるプログラムはありません。お店を開いている人はもちろん、すでにお店は閉めているがこの地で暮らしている人も参加してきました。また、まさにお金を掛けられない手づくりのイ

ベントで、チラシも絵が得意な人が制作し、印刷用紙も地元の紙店からの提供でした。こうして完成したチラシを皆で手分けして何千軒も配っていました。当日は歩行者天国となった会場で屋台やガレージセール、骨董市などが開かれ、ピーク時には3万人の人出を記録しました。しかし、メンバーの高齢化が進んだこともあって、2002年の18回目で「閉村」することになりました。

**Q** それを復活したきっかけをお聞かせください。

長田：「閉村」後も、「今年は開かないのですか」といった問い合わせをたくさんいただいてきました。そうしたなかで、皆さんと一緒に祭りを盛り上げてきた父親（三代目長田吉太郎氏）が亡くなり、昨年2月に「しのぶ会」を開いていただきました。会には知事さんや市長さんをはじめ多くの方々が参加してくださったのですが、かつてのメンバーの方々もしょうじき村のトレーナーを着て出席され、会場のあちこちでしょうじき村の思い出話が交わされました。その時に強く感じたのは、皆さん、しょうじき村を復活させたいと思いながら、言い出しっぺがいらないんだなということです。そこで、私が「しょうじき村を復活させましょう」と提案したところ、拍手喝さいでした。こうして9月末から準備を進め、これまでと同じように11月3日開催の運びとなりました。

**Q** 準備は順調に進みましたか。

長田：高齢化している状況は同じですから、思うようには進みませんでした。そこで、アパートの壁に映し出した第1回のビデオを見ながらビー

ルを飲む会を開催するなどして、少しずつ皆さんのモチベーションを高めていきました。また、準備の時にいつも考えていたのは、しょうじき村は自分たちのために行うのであり、それが結果として地域のためになるということです。最初から地域の活性化を目標にすると、いつしか祭りの開催だけが目的となってしまう、自分たちが求めているものから外れてくると思えたからです。と同時に、岩倉町や隣接する尾高町だけでなく、全国的にも珍しい、11寺が並び寺町や加茂川遊覧なども楽しんでいただくとも考えました。そのため、NPOや観光協会にも声を掛けて、今回は「よなご下町秋まつり」の一環として開催しました。鳥取県とも連携し、スタンプラリーや戸板市、プロと市民が一緒になった朝日座での新歌舞伎の上演、米子がロケ地となった映画「銀色の雨」の先行上映、食のみやこ事業などが行われました。戸板市というのは戸板1枚のスペースを自由に使うもので、朝日座はかつて歌舞伎などが上演されていた場所で、数年前から復活させようという動きが活発になっています。

**Q** 市民の反応はどうでしたか。

長田：参加者も非常に多かったですね。と同時に、しょうじき村に足を運んでくれた方からは「何かやっているとうれしいね」「懐かしいからやってきました」といった声が寄せられ、やって良かったと実感しています。しょうじき村は年に1日かぎりの「村」ですが、そこに行けば何か楽しいことがある、ほのぼのした気持ちになれると思っている人が多いことをあらためて知りました。うれしいことです。その感動は若い人も同じで、次回の実行委員長を務める若者もすでに決定しています。小さな地域の、手づくりの、しかも小さな祭りですが、これからも祭りを通して地元の人と参加者との「心の交流」を深めていきたいと思っています。